

博物館だより



No.208

令和6年3月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

博物館休館日カレンダー
2024年3月

日	月	火	水	木	金	土
25	26	27	28	29	1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31	1	2	3	4	5	6

休館日 ※情報はR6.2.16現在

◆博物館NEWS 令和5年度 第38回作品公募文化事業 みやこ町 少年少女俳句大会の結果について ― 大会概要と今期入賞作品の紹介 ―

京都平野に春の訪れを告げる名物行事「みやこ町三重塔まつり」。今年は4年ぶりに開催され、コロナ禍前の日常回復を印象付けましたが、まつり記念の文化行事「少年少女俳句大会」も、久しぶりの通常開催となりました。

コロナ禍でも実施してきたこの大会、今年も多くの中・小学校から応募をいただき、次のような成果をおさめることができました。

- ・応募総数：七七七九句
- ・参加児童生徒総数：三三三七三人
- ・内訳 小学校：四二七句
中学校：三五六句
- ・うち入賞・入選句：二六二句

「協力頂きました児童生徒の皆さんをはじめ、学校・保護者や協力機関等関係各位に厚くお礼を申し上げます。」

さて、大会の結果ですが、例年ご協力頂いています豊津俳句会(岩井小夜子代表)の皆さんによる審査の結果、以下の作品が最優秀・特選句として選ばれました。

●小学校の部

- ・特選「小宮豊隆賞」
花ふぶぎいしよにとんで行きたいな
久保小四年 川津 結誠
- ・特選「三四郎賞」
むらがつてまつかをきてつひがんばな
行橋小二年 竹下 琴春

― 大会概要と今期入賞作品の紹介 ―

- ・特選「蓬里雨賞」
じいちゃんのつくるほしがきおひさまの味
豊津小三年 特手 栞

●中学校の部

- ・特選「小宮豊隆賞」
秋晴れや奈良の大仏大きな手
育徳館中一年 向井 利心
- ・特選「三四郎賞」
ぶつだらけコールド勝ちの吹雪の日
犀川中二年 濱江 蒼亮
- ・特選「蓬里雨賞」
青春と夏の草原よくゆるる
今元中一年 矢裂 利紀

以上の句をはじめ入選賞句・教育委員会賞・秀逸計42句は短冊様の木札に記し、豊前国分寺跡公園内の梅に下げていきますので、梅見を兼ねてぜひご覧下さい。



▲公園内の梅の木に下げられた特選句を記す短冊様の木札
木札は選者・岩井小夜子様に染筆いただきました

◆講座教室・催し物ガイド 3月の歴史講座

- 【漢詩紀行講座】
3月2日(土) 9時30分
- 【古文書講座】
3月9日(土) 10時
- 【古典かな講座】
3月16日(土) 9時30分
- 【みやこ学講座】
3月23日(土) 10時

※日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途通知します。

博物館で「楽習」始めませんか?



▲ボランティア・ガイド編の様子 「昔のくらしと道具」学習
では子どもたちに体験を交えてのお話しなどをします

博物館は郷土資料と学芸員らのサポートによる知と学びの拠点です。以下の会や講座を利用して楽しく学びませんか? 詳しくは博物館へお問合せ下さい!

★博物館友の会

バスハイク・歴史たんけんウォーク等の学びの旅やイベントに参加できます。

★文化遺産ボランティア(豊み隊)・養成講座

町の宝を三つのアクション①ガイド(案内)②ガード(管理)③ワーク(調査)でサポートするスタッフを募集・養成する講座です。

1月の業務日誌から

1月19日(金)から3日間、東北大学の調査班(代表・佐倉由泰教授)が小宮豊隆資料の調査に訪れ、豊隆氏が戦時中に行った漱石文庫等の疎開など、文化遺産の保護に関する資料調査を行いました。新たな発見・展開を期待したいですね。

1月26日(金)、この日が文化財防火デーであることに因み、博物館で防火訓練を行いました。消防署から署員にもお越し頂いて「もしも」の際の動作について確認し、初期消火訓練も行いました。



▲この日は水消火器による初期消火訓練も体験しました



▲資料には関連する貴重な情報が残されているとのことでした

みやこの歴史発見伝 165
「天災は忘れた頃にやってくる」
漱石門下が記した震災記録②

令和6年お正月の地震

本年1月1日16時10分に石川県能登半島沖を震源とする最大震度7を記録した地震による津波、火災、家屋の倒壊などによる死者は200名以上にのぼり、現在も行方不明者の捜索が続いています。この翌日には羽田空港で、地震の被災地に向けた救援物資輸送中の航空機が旅客機と衝突・炎上する事故が起きました。さらにその翌日には北九州市の鳥町食堂街で大規模火災が発生し数多くの店舗が焼失しました。このように元旦から続く災害によって歴史上、稀に見る新たな年の幕開けとなった2024年ですが、「地震や事故は時や場所を選ばず発生すること」を改めて認識することになりました。ところで昨年9月1日に発生から100年を迎えた関東大震災については、漱石門下をはじめ多くの作家や文学者が被災状況やその後の復興に向けた取り組みなどについて各々の考えや表現を交えた記録を残しています。

芥川龍之介の記録
大正時代を代表する小説家で、夏目漱石門下の芥川龍之介（1892～1927）は、関東大震災の当日、自宅で被災しています。龍之介の妻、文夫人の回想録によると、昼食時に襲われた激しい揺れに龍之介は「地震だ」と叫びながら、二階で寝ていた妻子に構わず一人で庭に飛び出します。これを見た夫人は怒り「赤ん坊が寝ているのを知っているが、自分ばかり先に逃げるとは、どんな考えですか」と龍之介を叱りつけます。これに対し龍之介は「人間最後になると自分のことしか考えないものだ」とひっそりと呟いたと伝えられています。龍之介は、震災後の食料不足を見越し、また一人で逃げ出したことの罪悪感もあったことから、すぐに大八車いっぱいの野菜を調達してきたと伝えられています。震災の翌日、一家で避難しますが、この際に龍之介が持ち出したのは、夏目漱石から贈呈された1本の掛軸のみでした。その後、龍之介は、後に日本初のノーベル文学賞を受賞した川端康成とともに被災地を巡っています。この時二人は、被災の惨状を『地獄絵』と表現していますが、龍之介はこのような中でも避難した見知らぬ人同士が、親しく食べ物を分け合ったり互いに子守をしたりする光景を見て「とにかく美しい景

色だった。永久にあの記憶だけは大事にしておきたいと思っっている」とも述べています。みやこ町歴史民俗博物館には、彼の代表作「羅生門」が展示されていますがこれは龍之介が、夏目漱石の小説「三四郎」の主人公のモデルとなつた、みやこ町出身の小宮豊隆に宛て書籍を贈呈した際に、署名したものです。この書籍は、小宮豊隆との深い交流を垣間見ることができ資料として注目されています。因みに芥川龍之介の業績を記念して後に創設された「芥川賞」は現在、新人作家の「登竜門」として広く知られていますが、第3回の芥川賞（1936年上半期）では、みやこ町豊津出身の鶴田知也が執筆した著作「コシヤマイン記」が受賞しています。

漱石門下が記録した震災

小宮豊隆とともに代表的な夏目漱石門下の一人で、「日本の児童文学の父」と称される鈴木三重吉（1882～1936）は自身が



芥川龍之介が著書「羅生門」に記した小宮豊隆宛署名（みやこ町歴史民俗博物館蔵）

創刊した児童雑誌「赤い鳥」の中で「今後お互いに協同努力して一日も早くこの大負傷を癒やすことにつとめなければなりません」と復興に向けた心構えを説いています。また同じ漱石門下で、後に法政大学女子高等学校校長を務めた大分県臼杵市出身の野上弥生子（1885～1985）は日記の中で「火事で夜間は明るく灯が要らない位であった。今度こそ怖ろしいというものを感じ、見た。「つくづく人間の無力を知った。心から自然に対してケンソンの気ももちになり、神に祈った」と自然災害の脅威を目の当たりにした体験を語っています。また小宮豊隆と親交のあった哲学者の和辻哲郎（1889～1960）は「再び社会的大地震において経験するならば、その災禍はとうてい今回のごとき局部的なものには留まらない」と未来の震災に警鐘を鳴らしています。

寺田寅彦の「予言」

先にご紹介した漱石門下の物理学者で、小宮豊隆の親友であった寺田寅彦は、「天災は忘れた頃にやってくる」という警句を残した人物として知られています。彼は

関東大震災から7年後の昭和5年（1930）年11月26日に伊豆半島北部を襲った北伊豆地震の被災状況調査を行っています。関東大震災から「忘れる間もなく」発生

したこの地震では、死者272名、全壊家屋2,165棟を数える被害を記録しています。被災状況を目の当たりにした寅彦は、「今後いつかまたこの大規模地震が来たとする。そうして東京、横浜、沼津、静岡、浜松、名古屋、大阪、神戸、岡山、広島から福岡へんまで一度に襲われたら、その時はいつたわが日本の国はどういうことになるであろう。そういうことがないとは何人も保証できない。」「戦争はしたくなければなくても済むかもしれないが、地震は待つてはくれない。地震学者だけが口をすっぱくして説いてみても反響もない。そうして恐ろしい最後の審判の日はじりじりと近づくのである。」と述べています。3月11日で東日本大震災から13年を迎えますが、この震災や今年の正月に発生した地震は、彼が100年前に「予言」したように、今後想定される「大規模地震」の前触れと捉える研究者の意見もみられ「地震や事故は時や場所に関係なく発生する」ことを再度肝に銘じることが自身の命を守ることにつながることなのかもしれません。

漱石門下が各々の視点で書き記した、これらの震災記録は未来の人々に向けた重要な警告であり、またかけがえのないメッセージとして、これからも伝えられていくことでしょう。

（井上信隆）